しっとる？ 岐阜ヒストリー

その二

岐阜市は斎藤道三や織田信長など名高い戦国武将が活躍した舞台です。道三・信長は何故岐阜市を選んだのでしょうか？
英雄たちが欲しがった岐阜！ その歴史を作ってきた武将や武士団、彼らの知られざる活躍を一緒にひも解いていきましょう。
身近なところにある歴史が、新たな気付きにつながるかもしれません。

石谷氏ゆかりの土地を訪ねて

岐阜市石谷は岐阜大学病院や今年4月に完成したばかりの東海環状自動車道岐阜インターチェンジ北の山あいに位置する昔ながらの集落です。今から11年前の平成26年（2014）6月、この石谷の名を冠した石谷家文書の記者発表があり、本能寺の変や石谷氏・斎藤氏・長宗我部氏はと全国的に大きな話題になりました。発表翌年の2月、岡山県立博物館で開催された報告会では、満席の会場スクリーンに岐阜市石谷のバス停や公民館などが映し出され驚きました。

岐阜市ぎふ魅力づくり推進部
文化財保護課
特任研究員 **内堀 信雄**

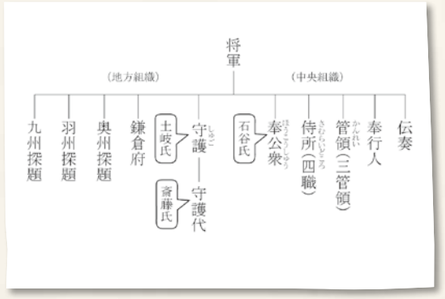
プロフィール
昭和34年　栃木県宇都宮市に生まれる
昭和61年　名古屋大学大学院文学研究科（考古学）卒業
岐阜市教育委員会にて信長公居館跡発掘調査などを担当。

主な著書
『東海の名城を歩く　岐阜編』（共編、吉川弘文館、令和元年）
『戦国美濃の城と都市』（高志書院、令和3年）

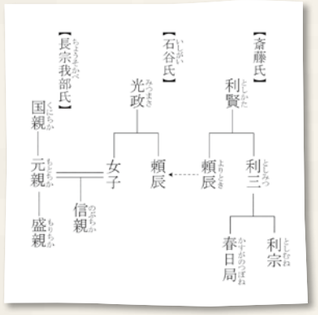
1 戦国時代の石谷氏

石谷氏は前回登場した土岐氏の一族です。室町時代初め頃までに美濃国方県郡石谷に土着し、土地の名前を名字として名乗るようになります。石谷氏は室町幕府において将軍直属の軍隊である奉公衆という役職につきます。奉公衆は幕府職制の中央組織に含まれており、ふだんは京都に住んでいます。ちなみに土岐氏が代々つとめた守護は地方組織で、守護の下には守護代がおかれ斎藤氏（斎藤道三とは別の家）がつとめます（図1）。

ある時期に斎藤氏出身の頼辰は石谷氏当主・光政の養子になります。この頼辰の実の弟が本能寺の変で大きな役割を果たした明知光秀重臣斎藤利三です。1563年、石谷光政の娘と土佐の武将・長宗我部元親が結婚します。こうして斎藤氏・石谷氏・長宗我部氏は血縁関係で結びつきます（図2）。



■図1　室町幕府職制



■図2　斎藤氏・石谷氏・長宗我部氏系図

石谷光政と頼辰は室町幕府13代将軍足利義輝に仕えますが、1565年、義輝は暗殺されてしまいます。1568年、岐阜城主織田信長は義輝弟の足利義昭を奉じて上洛し、義昭を15代将軍に据え幕府を再興しますが、石谷氏は義昭には仕えていないようです。1571年頃、斎藤利三や石谷頼辰は明知光秀に仕え、光秀の使者として信長と元親の間の連絡調整の役割をつとめます。

1575年、長宗我部元親は土佐を統一します。1578年、元親嫡男の信親は、織田信長から「信」の一文字を拝領します。この頃は元親と信長の関係は良好でしたが、その後急速に悪化、1582年には信長は元親征伐（四国攻め）を計画します。しかし、四国攻め直前の6月2日に本能寺の変が起き、信長親子が死去したため、元親は最大の危機を免れます。本能寺の変に続く山崎の戦いで、明智光秀や斎藤利三は羽柴秀吉に敗れて亡くなります。一方、石谷頼辰は生き延びて元親のもとで重臣として活動します。そして1586年、九州・戸次川の戦いで島津勢に敗れて死去します。その後、石谷氏がどうなったかはよくわかっていません。

2 石谷家文書と木幡口

石谷家文書は岡山県林原美術館が所蔵する古文書群で、全3巻・47点あります。1535年から1587年までの約50年間、石谷光政・頼辰2代の時期の文書が伝えられています。記者発表時に特に注目されたのは本能寺の変に関係する文書です。

令和2年度（2020年度）、岐阜県博物館で開かれた特別展に奉公衆時代の石谷家文書2点が展示されました。そのうちの1点は天文11年（1542年）に石谷氏が代官を務める木幡口関所などでの雑税徴収の権利を保障したものです。この木幡口関については京都市伏見区と宇治市六地蔵の2つの説があります。伏見区説は『都名所図会』などに記されるものですが、開発による地形改変が大きく場所がはっきりしません。宇治市六地蔵説は歴史地理学者の中村武生氏が提唱されています。現地を訪ねると京都と宇治・奈良を結ぶ街道沿いで大津へ向かう道もここから分岐しています。JR奈良線や地下鉄東西線の六地蔵駅もすぐ近くにあり、今も昔も変わらない交通の中継地です（写真1）。石谷氏の収入源になった関が設けられるのにふさわしい場所だと思いました。

■写真1　宇治市六地蔵駅周辺

3 石谷氏と岡豊城

長宗我部元親の居城・岡豊城（高知県南国市）は、比高約80mの山城で山頂には主郭があり礎石建物跡や元親が土佐を統一した天正3年の銘が入った瓦が見つかっています（写真2）。主郭から少し降りた通路沿いには出入口（虎口）があります。石谷家文書が縁で昨年（令和6年）初めて訪問したところ、虎口付近の2地点に1～1・5m程もある巨石が立て並べられていることがわかりました。また山麓の瑞応寺（長宗我部氏菩提寺）の発掘調査でも巨石を据え付けた出入口とみられる遺構が見つかっています。

■写真2　長宗我部元親像
（高知県立歴史民俗資料館前）

岡豊城や瑞応寺にみられる巨石は、形や作り方からみて岐阜城の巨石石垣と同じ技術で築かれた可能性が高いと考えます。加藤理文氏は天正3年銘瓦について、明智光秀を通じて信長が瓦葺への援助をしたと推定されています。巨石石垣についても光秀や石谷頼辰・斎藤利三らを介して信長による技術提供があったのでしょう。

本能寺の変との関係が注目されてきた石谷氏・石谷家文書ですが、ゆかりの土地を訪ねることで予想をこえる新たな気づきがありました。

＊次回は8月号です。お楽しみに

＊（参考文献）加藤理文『織豊権力と城郭』高志書院、平成24年　浅利尚民・内池英樹『石谷家文書』吉川弘文館、平成27年　松田直則『岡豊城』『四国の名城を歩く　愛媛・高知編』吉川弘文館、令和6年